

大学における継承語教育の展望 —中国語を履修する中国ルーツの学生たち—

小 川 典 子

1. はじめに

近年、海外から日本へ移住してくる人々や国際結婚の件数が増加しており、それにともない外国にルーツを持つ子どもの数も増えている。そして、これらの子どもが成長して大学に進学するケースもまた多く見られるようになってきた。現在、多くの大学では第二外国語が必修科目となっているのだが、大学に入学した外国ルーツの学生の中には、自身のルーツのある国の言語を大学の授業で履修し学んでいる者も少なくはない。

では、彼らにとって自身のルーツのある国の言語を学ぶことはどのような意味を持ち、彼らは何を求めて学習しているのだろうか？本稿では中国にルーツを持ち、なおかつ中国語を学習している立命館大学の学生の事例より、彼らをとりまく背景と中国語の履修状況を分析する。その上で、これからの大学における継承語教育に何が求められるのか、その展望を考えていきたい。

2. 継承語学習者とその背景

2.1. 背景

文部科学省の『学校基本調査』¹⁾によると、2015年の段階で日本の国公私立の小・中・高等学校等には81,899人の外国人児童生徒が在籍していたという。また厚生労働省の『人口動態統計特殊報告』²⁾によると、2015年の国際結婚の婚姻件数総数は20,976件で、両親もしくは親のどちらか一方が外国人である子どもの数は相当数になるであろうことが予測される。表1は文部科学省初等中等教育局国際教育課(2018)による統計で、高等学校に在籍する日本語指導が必要な外国籍の生徒の母語別人数である。これを見ると、中国語を母語あるいは第一言語とする生徒が最も比率が高いことがわかる。

表1 日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の母語別在籍状況(高等学校)³⁾

英語	韓国・ 朝鮮語	スペイン 語	中国語	フィリピン 語	ベトナム 語	ポルトガ ル語	その他	合計
56 (1.5%)	34 (0.9%)	250 (6.8%)	1,152 (31.3%)	1,098 (29.8%)	90 (2.4%)	415 (11.3%)	584 (15.9%)	3,677 (100.0%)

友沢（2014）は「中国帰国生や渡日生の高校進学率が高まり、大学進学を目指す生徒も増えている」としており、小川（2017）でも大学入試センター試験「中国語」の内容的妥当性と受験者の実態を分析した上で、中国語を母語あるいは第一言語とする中国ルーツの生徒がセンター試験「中国語」の受験者の大半を占めている可能性を指摘している。「大学全入時代」と言われる今日、学生確保のため TOEIC、英検、中国語検定等に代表される語学資格取得者を AO 入試や推薦枠で積極的に受け入れる大学も増えており、これら入試制度の多様化もまた外国にルーツを持つ生徒の大学進学を促していると考えられる。このような背景のもと、今日では大学の中国語のクラスに一定数の中国ルーツの学生が在籍することが常態となっている。

2.2. 継承語教育と継承語学習者

中島（2010, 2016, 2017）は親から受け継いだことばを「継承語」とした上で、親の母語・母文化を子に伝えるための教育支援を「継承語教育」と定義している。近年、アメリカ、カナダ、オーストラリア等では継承語話者への関心が高まりつつあり、その即戦力が国の「言語資源」「社会経済的資源」と見なされている。そして国際社会の第一線で活躍する貴重な人材が育てられるとして、政府が率先して継承語教育の支援に乗り出している。これより中島（2010）はマルチリンガルの視点に立って日本がすべきこととして、継承語教育の実践と国の言語教育政策の必要性を訴えている。

日本国内でも、外国ルーツの児童の言語能力に関する研究が近年活発になりつつあり（櫻井他 2012；真嶋他 2014 等）、公立小学校では継承語教育の実践（櫻井 2007；田他 2017）も取り組まれるようになってきた。しかし外国ルーツの児童や生徒の存在を解決すべき問題としてとらえ、対応する小学校、中学校、高校の動きと比較し、大学における受入れ体制は十分であるとは言えない。国外では、大学に在籍する継承語学習者に適した教授法も検討されるようになってきている（曹賢文 2014）。グローバル人材が必要とされる時代に、今後日本でも継承語が「資源としての言語」として認知され、継承語教育によって日本の人的資源、言語資源を豊かにすることが求められるだろう。これらの現状を踏まえ、本研究では大学に在籍する継承語学習者の実態を調査し、日本ではこれまで重視されてこなかった、大学における継承語教育のあり方を考えていきたい。

3. 立命館大学の外国語教育と既修者対応プログラム

筆者が所属する立命館大学では各学部の教学理念に基づき、必修外国語科目が配置されている⁴⁾。立命館大学で第二外国語として学習できる言語にはドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、朝鮮語の5言語⁵⁾があり、学生はこれらの中から1言語を選択して単位を取得することが求められている。多くの学生は大学入学後にこれらの言語を初めて学習することになるわけだが、立命館大学では大学入学前に当該言語の学習経験がある学生を対象に、「既修者対応プログラム」を設置している⁶⁾。なお、既修者対応プログラムの受講資格者は以下のようにされている。

- ① X 高校⁷⁾の文科コース出身者で、第二外国語の単位を取得した者。
- ② ①以外の学生で、高等学校等で、対象言語を授業として履修した者（当該言語について4単位⁸⁾相当以上学習した程度が目安）で、かつ、ガイダンス終了後の面談で許可を受けた者。
- ③ 当該言語圏の国・地域で原則として1年間以上在住し帰国した者で、かつ、ガイダンス終了後の面談で許可を受けた者。
- ④ 上記①～③と同等レベルの語学力があり、かつガイダンス終了後の面談で許可を受けた者。

大学では①～④の何れかに該当する者は既修者プログラムを受講することを推奨している。しかしここで留意しておきたいのは、既修者プログラムの履修申請はあくまでも学生の自己申告制であるという点だ。つまり①～④の何れかに該当する学生であっても、本人が申請しない限り、大学側はどの学生が該当するのかを調べる術がない。そのため初修の学生が受講する「初修外国語・基礎クラス」に、上記に該当する学生が在籍していることも往々にして見られるのが現状である。

4. 調査概要

4.1. 調査目的

本研究では大学に在籍する多様なバックグラウンドを持つ学生の中から、中国語圏にルーツを持ち、かつ大学で中国語を履修している学生を抽出し、彼らがどのようなバックグラウンドを持ち、なぜ大学で中国語を履修しているのかを調査する。そして調査の結果から、今後の大学における継承語教育のあり方を考えていきたい。

4.2. 調査協力者

調査には立命館大学のそれぞれ異なる学部・に在籍し、中国語の授業を履修している1年生5名に協力してもらった。この5名の学生は、何れも両親のどちらかが中国大陆もしくは台湾出身の所謂「日中・日台ハーフ」で、全員が日本国籍である。本稿ではこの5名の学生を、それぞれAくん、Bさん、Cさん、Dくん、Eさんと記号化し仮名にする。なお5名の学生のうち、筆者が直接教えているのはEさんのみで、その他の学生は他の中国語教員からの紹介を経て出会うことができた。

4.3. 調査方法

4.3.1. アンケート調査

調査ではまず学生にアンケート調査を行い、彼らのおおまかなバックグラウンドを把握した。アンケートは自由記述方式で以下の11点を質問した。

- 1) 家族構成を教えてください。
- 2) 現在一緒に住んでいる家族は？
- 3) お父さんの出身地はどこですか？
- 4) お母さんの出身地はどこですか？
- 5) あなたはお父さんと何語で話していますか？
- 6) あなたはお母さんと何語で話していますか？
- 7) お父さんとお母さんは何語で話していますか？
- 8) (兄弟がいる場合) 兄弟姉妹とは何語で話していますか？
- 9) これまでに中国語圏に住んでいたことはありますか？いつ？どのぐらいの期間？
- 10) 長期休暇などに中国語圏の親戚・家族に会いに行くことはありますか？
- 11) 大学入学前に中国語を学習したことはありましたか？

4.3.2. ライフストーリー・インタビュー

上記のアンケート調査の後に、学生が記述した内容を参照しながら5名の学生へのライフストーリー・インタビューを行った。ライフストーリーとは「個人のライフ（人生、生涯、生活、生き方）についての口述の物語」であり、ライフストーリー・インタビューは「個人のライフに焦点をあわせて、その人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の1つ」と位置づけられている（桜井2012）。ライフストーリー研究は対話的構築主義アプローチに基づくもので（桜井2002）、インタビューによる語りは、過去の出来事や語り手の経験したことというよりも、語り手とイン

タビュアーの相互行為によって<いま-ここ>で構築されるストーリーであるとされている（桜井 2002；三代 2015）。

調査は大学内の教室を貸し切り、筆者と調査協力者の1対1で行った。調査時間は1人あたりおおむね2時間程度で、調査の間は調査協力者の承諾を得た上でICレコーダーで録音し、同時にビデオ撮影を行っている。収集した音声データはすべて文字化作業を行った後に、各学生の語りを分析した。

5. 5名の継承中国語学習者の事例

5.1. Aくんの場合

5.1.1. Aくんのプロフィール

Aくんは父親が日本人、母親が中国人で、現在は母親と2人暮らしをしている。Aくんは日本生まれだが、幼稚園の年長の時に、母親の故郷である中国南方都市の桂林にいる伯母に預けられ、半年間親元を離れ中国で生活をしている。現在家庭内では、母親が使う桂林語をAくんも使用しており、日本に帰国後小学生の時には標準中国語を学習した経験もある。現在Aくんは大学の「既修者クラス」に在籍し中国語を学習している。

5.1.2. Aくんのライフ

Aくんは中国の伯母に預けられるまでは、両親と祖母と一緒に暮らしており、家庭内言語は日本語のみで中国語を使用する機会は全くなかった。しかし中国へ移ると、桂林語という現地の方言と中国標準語の2言語の環境の中で生活を送ることになる。Aくんは中国へ行った当時のことを次のように回想している。

A018⁹⁾：なんか、すごく中国語と日本語の脳が逆転したみたいな。

A044：アイデンティティが結構中国の方に寄ってった。

日本に帰国後は母親との2人暮らしになり、家庭内言語は桂林語のみになる。日本に戻ってからの思い出をAくんは次のように語っている。

A054：でも小学校の時に、結構、えっと、多分喧嘩とか言い合いになった時に、「中国人」っていうのをよく言われて。

A055：それがちょっと自分の中でひっかって、なんか、自分は日本人やけど、まあ、中国の血も入ってるんだけど、別に中国人ではないし。なんか、そういうこと言われて、

なんか傷つくというか。ありましたね。なんか自分……、んー、どう反論すればいいのか、あんまりわからなかった。その時期がやっぱ1番、なんか、自分はどっちなんかなみたいな、よく考えさせられたみたいな感じがありましたね。

Aくんが帰国後に移り住んだ場所は、関西圏でも中国人の移住者が多いことで知られている地域であった。そのためAくんが通ったY小学校や隣接するZ小学校には、中国にルーツを持つ子どもを支援するための教室があり、中国の言語や文化に触れる機会も多かった。小学校には中国語の専門支援員も配属されており、その縁でAくんは小学校の4年間、週末には中国語を学習することになる。

A072：その、小学校に、専門の教室みたいなのがあって。その中国にルーツを持つ子たちが、なんか集まって授業するみたいなのが。

A084：中国の子とか、お父さんが中国の人とか。

A109：あー、なんか、行事とかがあって。その、えっと、そのY小学校の子と、そのZ小学校とか、周りのすべての中国にルーツ持ってる子で、えっと、なんか、ホールを借りて。それはちょっと名前忘れた。なんちゃらフェスティバルみたいなのがあって。獅子舞とかやったりするんですよ。

A112：その時は普通に中国語でも日本語でも交流したりして。

A093：ある先生がいて。その先生が、なんか参観とか懇談の時とかに通訳してくれる、その中国語の先生みたいな人がいて。

A097：うん、その先生が、まあ土曜になんか教室借りて。で、まあ勉強教えてくれたりピンイン¹⁰ 教えてくれたり、漢字教えてくれたり……。

A100：まあそこでやっぱピンインとか、多分そこで習わなかったら、僕ピンインあまりできてなかったと思います。

A102：お母さんもピンインできないんですよ。

そしてAくんは高校生の時に、自身の中国語能力を活かすことができる体験をしている。Aくんはこの体験からやりがいを感じ、将来も自分の中国語能力を活かした仕事をしたいと考えるようになったと語っている。

A405：高2とかなったら、修学旅行とか、あの、台湾から留学生が来るんですよ。

A406：で、その時に僕が、そういう台湾留学生を迎える会みたいなので司会、舞台でやっ

た時に、通訳とかしたり。

A407：やっぱその時は（高校の先生やまわりの友人が）「すごい」とか「ありがとう」とか言ってくれたので、本当に、やっぱりやりがいみたいなのを感じて。それで将来なんか、んー、やっぱそういう中国の人とか中国と日本の人とか繋げられる仕事につけたらいいなって思い始めましたね。

A くんは中国語能力は大学受験の際にも活かされている。A くんは高校時代に当時の先生から中国語検定の受験を勧められ、その際に取得した検定資格を利用して、AO 入試で立命館大学に合格している。

A458：えっと、高校の時になんかちょっと先のこと見すえて、中国語検定をとろうと思って。

A479：で、先生からもとった方がいいんじゃないかって、そういう資格があった方が、なんか役に立つよ、みたいなことを言われて。僕はその時、別に使おうとは思ってなかったんですけど。

A484：で、見た時にちょうどその立命のここのAOのやつを知ったんですよ。

5.1.3. A くんが中国語を学ぶ理由

A くんは中国語を学習する理由について、大学で中国の方言を研究したいからだとして述べている。中国では各地域で様々な方言が使用されており、日本の方言とは違い、各方言の差異は発音・語彙・文法ともに大きく異なる。A くんは中国にいる従兄から様々な方言を教わったことや、旅行で台湾を訪れた時の体験から、中国の方言に興味を持ったと語っている。

A502：あと、なんかいろんな人とか、方言、言葉系が、僕やっぱ興味あったんで。そこで研究したいなと思って。

A551：従兄からそういうのを。

A557：この子から、いろんなことを聞いて。

A558：例えばこういう桂林語聞いたり、湖南¹¹⁾の方の言葉とか。

A562：色々なんか、あー、そう、いろんなバリエーションがあって。で、台湾行った時も“泡面¹²⁾”とかいって、でもそれって面白いなと思って。

さらにA くんは自身のアイデンティティに関しても以下のように触れている。

A915：勉強することは、やっぱり自分のスキルになることがあるし。やっぱりなんか……、

日本語ばかり勉強してたら多分日本語の方が強く、強く主体的になって、中国語勉強して中国語だけじゃなくて中国のこと勉強していったら、その、なんていうんですかね、日本のアイデンティティと中国のアイデンティティが多分両方いい具合になって、自分の中で共存できるかなと。

A916：それがやっぱ、中国語勉強する意味かなと思いますね。

5.2. Bさんの場合

5.2.1. Bさんのプロフィール

Bさんは日本生まれ日本育ちで、父親が日本人、母親は中国の上海の出身である。家庭内では両親ともに日本語を使用しており、毎年休暇の際には2週間ほど上海の祖父母のもとを訪れている。Bさんは立命館系列高校の出身で、高校2年と3年の2年間、第二外国語として中国語を学習している。Bさんも現在「既修者クラス」に在籍している。

5.2.2. Bさんのライフ

Bさんの母親は中国人だが、外国人とわからないほど流暢な日本語を話すことができるため、家族間で使用する言語は日本語のみであった。しかし母親がBさんを叱る場合など、限られた場面では上海語を使用することもあったようである。また毎年上海の祖父母のもとを訪れていることもあり、Bさんは上海語であれば少しは聞いたり話したりすることができたようだ。

B367：でもちっちゃい時は、たまにめっちゃ怒られた時は上海語でした。

B370：うん、ちっちゃい時はそうやったんですけど、最近は普通にずっと日本語です。

B376：でも上海語だけなら、ちょっとほんまに、小学校低学年の時点で普通に聞きとれてたし、ちょっとだけしゃべれてました。

Bさんは中学受験を経て、中学・高校と立命館系列校に通っている。Bさんの母校のX校では、帰国子女や外国籍の生徒を対象とした入試を実施している関係上、多様なバックグラウンドを持つ生徒が多く在籍していた。そのため、Bさんのような生徒は決して珍しい存在ではなかった。

B641：なんか仲いい子とか、多分女の子は結構、噂とかもあってBがハーフってことを知ってる子が多かったから。

B667：上海の帰国子女が2人ぐらいたし、台湾も。

B669：あー、普通に、いっぱいそういう人もいたから。

B670：帰国子女多いから。X 高校は。全然普通でした。

また X 高校では高校 2 年次から第二外国語の授業が始まり、B さんは高校で初めて標準中国語を学習している。B さんはそれまで上海語にしか触れたことがなく、授業開始前は不安を感じていた。しかし授業が始まってみると、思いのほか上海語の知識から中国語を理解することができたため、高校での授業は B さんにとっては簡単であったと語っている。

B643：やっぱ B は中国語とったんやな、みたいなんは普通に（友達から）言われました。

B678：なんか授業始まった時に、最初でもちょっと不安やったんですよ。なんか、上海語しか知らんから、しゃべれんから、中国語わからんなー、って思ってた。受けたんですけど、なんか思ったよりわかって。

B681：あっちのニュースとかテレビで、あっち行った時に、あー、ニュースで聞いたわ、とか。

B685：あと、上海語結構違うって言っても似てる単語は似てるんですよ、発音とかが。

B686：これ絶対上海語のあれやとか思って、日本語の意味見て、あ、あってたみたいなのは、結構あったから。だから中国語は習ってへんかったって言っても、日本語しか知らん子よりはできたとは思います。普通に。授業はだからめっちゃ簡単でした。

B さんはさらに、自分が「ハーフ」であることを「うれしい」と語っている。その理由について、中国一の大都市である上海のことが大好きだからと説明している。

B958：え、でも、多分 B は上海好きなんです。

B978：いや、なんか普通に、おしゃれじゃないですか。

B981：きらびやかかっていうか。

B988：めっちゃ好きです。

B1025：上海やからいいのであって。

B1028：なんか、お母さんの出身が北京やったとして、それも普通に中国とのハーフやないですか。なんかそれって今ほど「ハーフ」って言葉うれしく思えへんかったかもしれへんなって。

B1032：だって、「半分上海」ってうれしくないですか？

5.2.3. B さんが中国語を学ぶ理由

B さんは「既修者クラス」で中国語を学習する理由について「成績などに関係なく、自分が

もっとしゃべれるようになりたいから」と説明している。そして、同じ高校出身で中国語の学習歴があるにも関わらず、初修者のための「初修者クラス」にいる学生について「バカらしい」と述べている。

B933：絶対、初修（クラス）やったら簡単すぎるな、と思って。

B941：テストとかどうでもいいし。普通に自分がもうちょっとしゃべれれば、もうちょっと中国行って普通に1人でしゃべれるんやったら、既修者（クラス）行ったらいいやつて思っ

B942：はっきり言って、初修者（クラス）行く人はバカらしいなと思って。

また Bさんは自身が中国語を学習する理由について、自分は「半分中国」だから、中国語を話せなければならない、とも語っており、中国で1人で生活できるぐらいにはなりたいと述べている。

B944：うーん、なんかハーフやから、中国語をやらんことは自分にとって、なんか……、えー、なんかわかりますか？え、なんかなんか、すごい国籍も日本やし、ずっと日本に住んでたから、めっちゃ「日本人感」強いなって自分でも思うんですけど、なんか身体開いたら、中身自体は別に日本の方が多たってわけでもなく、半々じゃないですか。2分の1ってことは。

B952：日本の割合も中国の割合も一緒やから、普通に考えて、日本語普通に話せるのに、中国語あんまり話せへんっておかしくない？と思って。

B953：なんか身体としては半分だから、中国語も話せな変やろって感じ。なんか、その、文法で、完璧な文法が書けるとか、テストでめっちゃいい点とれるとかじゃなくて、普通に困ることなく、中国で1人で生活できるぐらいには話せるようになりたいなっ

5.3. Cさんの場合

5.3.1. Cさんのプロフィール

Cさんもまた日本生まれ日本育ちで、Cさんは父親が上海出身で、母親は日本人である。Cさんは家庭内では母親とは日本語で会話をしているが、父親とは日本語と上海語を交えて会話をしている。父親と会話をする際の日本語と上海語の使用比率は6:4~7:3程度で、日本語の方が割合は高い。Cさんには弟がいるが、弟とは日本語だけで会話をしている。Cさんは大学入学前に中国語を学習した経験はないが、毎年1回2週間ほど上海に滞在している。Cさん

も上述の2名と同様に「既修者クラス」に在籍している。

5.3.2. Cさんのライフ

Cさんは日本に留学に来た上海出身の父親と日本人の母親のもとに生まれ、現在まで日本で生活をしている。幼少時に祖父母が日本の永住権を取得して上海から移住してきたため、かつては両親と祖父母と共に日本で同居していた。

C044：なんかその、おじいちゃんとおばあちゃんが日本語わかんないんで、お母さんとか弟いても上海語しゃべってて。

C054：上海語が中国語だと思ってました。

C075：四声¹³⁾とか言われても、あのなんか大学入るまでは字とか見たこともないから、みたいな感じなんで。

上記のように述べていることから、Cさんは大学入学時まで標準中国語に触れることはほとんどなく、父親が仕事のやりとりで電話をする際に使う中国語を横で耳にしたり、台湾の音楽をYouTubeで聴いたりする程度であった。そして祖父母が上海語しかできなかったため、日本人の母親も上海語である程度のコミュニケーションをとっており、小学校までは家庭内言語は上海語であった。しかしCさんが小学校5年生の時に祖父が亡くなり、父親も日本語が流暢であったため、その後は家庭内言語が日本語へと変わっていく。Cさんは現在の上海語の使用状況について次のように語っている。

C053：あ、そう、あ、うーん、上海語なんかちょっと、うーん、ほんまにしゃべらなくなっただんで。

Cさんの母親は非常に教育熱心で、一時はCさんを上海の小学校に通わせようと考え、中国まで学校見学に行っていたという。しかし最終的にCさんは、小・中・高校と私立の女子校に通っている。Cさんは高校ではもともと理系のクラスに在籍していたのだが、現在は国際関係学部に入學している。その理由についてCさんは「多分、家の影響じゃないですか」と語っている。

C351：理系なんです。本当は。

C352：もともと国公立（大学）を志望してたんですけど、併願で私立文系選んで。最終的には文系を受験しました。

C355：途中で（文系に）変えました。もう直前で変えました。出願1週間前。

C365：ちょっと国際系もいいなって思ってたんで。

C366：多分、家の影響じゃないですか。

C368：なんか、もともと理系行った時点で、お父さんは文系に行ってほしかったらしいんですよ。

C369：お父さんもずっと文系で、大学の中から。（Cさんが）語学とか、中国語とか英語とかも得意だったんで。

5.3.3. Cさんが中国語を学ぶ理由

Cさんは大学で中国語を履修した理由について、中国や中国語への関心を挙げている。そして現在「既修者クラス」で一緒に受講している前出のAさんと比較し、自分の中国語を「中途半端」と表現している。

C426：英語よりも中国語のほうが興味あるし。

C429：なんかあの、Aさんとかも流れるような中国語じゃないですか。でも自分は違うし。お父さん中国人やのになんか中途半端って思ってた、いつも。それをちょっと、ちょっとでもましに。そういう思いと中国好きっていう気持ち。

またCさんは「既修者クラス」があったことも中国語を選んだ理由の1つとして挙げ、さらにBさんと同様に、中国語の学習歴があるにも関わらず「既修者クラス」に進まない学生のことを「ちょっともったいない」と表現し、自分自身は「そういう機会があるのなら上を目指したい」と語っている。

そしてCさんは「最近中国人留学生とよく話をしている」と前置きした上で、やはり「自分は半分中国の血が流れている」と述べ、「腹を割って話せるぐらいベラベラになる」のが目標であると語っている。

C432：既修者クラスっていうのがあったっていうのと。

C436：でも、フランス語とか、あんまり興味ない。既修者（クラス）があるんやったら入れたらいいなと思って。そもそもあの既修者（クラス）に自分が入れるレベルかどうか分からなかったんで。入学前にめっちゃ勉強したんですよ hh¹⁴⁾。

C447：（既修者クラスを）選ばない人に対して、ちょっともったいないと思います。まあでも、自分も、既習者クラスに行くレベルを持ってるのかっていうので結構悩んだんで。そういう人もいるかなと思いますね。まあ（中国語力に）全然自信なくて、取りあ

えず一からやってみようかっていう人もいるかもしれないし、あとは、（学習歴がある人にとって「初修者クラス」は）単位が取りやすいからかな、とかも思いますし。でも自分は、なんかちょっと行けるんやったら、せっかくそういう機会があるんやったら、上目指したいなって思ったんで。

C448：目標は、もう腹割って話せるぐらいです。なんか外国人にしゃべる時って、なんかちょっと遠慮するじゃないですか。だから、それが無いぐらいまでやっていけたらなって。いつまでかかるのか、わかんないですけど。

C491：あ、なんか最近よく思うのが、あの中国人の留学生と最近よくしゃべるんですけど。

C493：BBP¹⁵⁾。言語交換サービスみたいなので知り合った人と。あっちは(Cさんに対して)日本人としてしゃべってるじゃないですか。自分がこうやって「日本人の目線は」みたいな感じで、「日本人は」みたいなこと言うと、お父さんとか、お父さんの親戚とか、すごい中国無視してるみたいな感じやって、すごい痛いんですよ。だからちゃんと半分半分、血流れてるんだよっていうことを、話をされた時に両方ペラペラになりたいと思って。それがいいです。それを目標にして。

5.4. Dくんの場合

5.4.1. Dくんのプロフィール

Dくんは父親が日本人、母親が中国上海の出身で、現在は両親と日本で生活している。しかし小学校を卒業するまでは、親の教育方針で中国に住んでいた。そのため小学校では、現地の国語の授業として毎日中国語を学習していた。日本と中国は学校の開始時期が異なるため、Dくんは中国で小学校を卒業した後、日本の小学校にさらに半年通い、そのまま日本で中学、高校、大学と進学している。今でも年に1~2度は、中国にある母親の実家に行くことがある。

Dくんは中国で生活をしていた期間の方が長いこともあり、日本語よりも中国語の方が得意である。しかしDくんが履修しているのは初修者のための「初修外国語」の授業である。

5.4.2. Dくんのライフ

調査にあたり、インタビューでは、調査協力者には自分が話しやすい、表現しやすい言語で語るよう伝えている。そのためDくんは中国語と日本語を交えて話をしている。

Dくんは中国の小学校を卒業して日本に来た当時のことをふり返り「とても驚いた」「いろんなことが違った」と語っている。

D087：嗯……，来了日本之后是进了日本的小学，就是感觉很震惊。

（うん……日本に来てから日本の小学校に入って、すごく驚いた。）

D088：因为很多事情都要学生自己做。

(だって、いろんなことを全部生徒が自分でやらないといけないから。)

D089：比如说打扫房间什么的。

(たとえば部屋の掃除だとか。)

D090：还有就是学生都是一个人自己去上学。还有那种交通安全的那种帽子也很完善。还有就是，最，最不一样的就是那个发饭的时候。吃饭的时候，就是老师和学生一起吃，吃的也是一样的。中国那个老师吃的是不一样的。

(ほかにも生徒が自分1人で通学するとか、それから交通安全の帽子なんかがあるのもすごい。あと、1番違ったのは給食を配る時。ご飯を食べる時、先生と生徒が一緒に食べるし、食べるものも一緒だし。中国だったら先生は違うものを食べている。)

D094：对。还有就是……额，要学生自己去拿饭，然后饭后之后，这个，牛奶盒子都要撕开来洗干净晾干。这个都是中国没有的。

(そう、それから……、あ、生徒が自分で給食を取りに行く。それから給食の後、牛乳パックを開いてきれいに洗って乾かす。こんなのは中国では無いことだ。)

D097：很多不一样。

(いろんなことが違った。)

Dくんは中学時代を「とても楽しかった」と回顧している。そして中学では友人もできて、日本語も理解できるようになっていたと語っている。しかし中学時代は全く勉強をしておらず、ゲームばかりしており、成績はとてもひどかったと述べている。

D186：然后当时……对，有几个比较淘气的吧，就是ヤンキーっぽい人。

(それから当時……うん、何人かちょっとやんちゃな人がいた。つまり、ヤンキーっぽい人。)

D187：同学同学（同級生、同級生）。でもイジメはなかった。なんかみんな、「中国語教えてや」みたいな、なんか変な中国語を（教えてほしいと言ってきた）……。

D192：そう、そこから仲良くなった。

*204：hhh 那个，老师讲的内容你都能听懂吗？

(hhh 先生が話す内容は全部聞きとれた？)

D204：对，能听懂。但是没想去听。

(うん、聞きとれた。だけど、聞きたくなかった。)

D207：然后就是，中学的时候我只是完全没有学习。

(中学の時は、全く勉強していなかった。)

Dくんは県内の公立高校に進学するのだが、Dくんは自身の母校のことを「偏差値がすごく低い」「底辺高校」と形容している。そして周りの同級生のことを「人はいいけど、みんな勉強嫌い」と述べている。しかしDくんは高校に入ってから自身の考えを改め、予備校に通いだし、「良い大学」に行くため必死に勉強をするようになったと語っている。

D238：（大家）读书不怎么好。周围的人嘛，都是不爱学习的。

（みんな勉強はあんまりできなかった。周りはみんな勉強嫌いなものばかりだった。）

D245：就那种，上课的时候也没怎么，大家都不怎么认真听。我觉得剩下是不行，我觉得我要上个好一点的大学。

（授業の時には、みんなあんまり真面目に聞いてないかんじで。残った自分自身もダメ。自分は良い大学に行かなきゃと思った。）

D248：可能就是……也有很多影响吧。就是那个中国不是有很多别人家的孩子嘛。就那种，我妈妈也会跟我说，你看别人家的孩子大家读书都很好，这个小孩是同志社的，这个是什么关西大学的。虽然没有跟我说你要去什么好大学，但是每天跟我灌输这种思想，让我就觉得很不爽。然后就是说什么，就觉得我也可以考，我当时就觉得。然后就学习。（多分……いろんな影響があったと思う。その、中国の、他の家の子どもがいるじゃないですか。それでお母さんが「あなた見てみなさい、よその家のみんな勉強よくできるじゃない」「この子は同志社だ」「こっちは関西大学だ」とか言うし。どこの大学に行けとは言わなかったけれど、毎日そういう考えを植えつけられて、すごく嫌だった。だったら自分も受けてみようと思って。当時そう思って。それから勉強した。）

D265：もう、今、今とかもう多分もうできないです。もう電車とか夏の電車の中で一生懸命（単語帳を）見てたし。朝とかも、シャワー浴びて、電車乗って、単語一生懸命覚えてる。学校通っても勉強してた。今もう絶対、絶対無理、今もう8時でも起きられません、もう。

Dくんは大学の専攻も「合格しやすさ」を基準に選んでいる。そして自分のことを「真面目ではない」と述べ、将来の夢も「全くない」と言っている。大学に入ったのも何かをやりたかったからではなく、「自分を証明したい」「勉強ができないと思われるのが嫌だ」から頑張ったと語り、また自分自身の将来のためでもあるとして、「良い学歴」が必要だから大学を受験したと語っている。

D361：（大学の専攻は）△△△と〇〇〇を選びました。なぜなら、赤本とかやるじゃないで

すか。赤本の一番前にのってたんですよ。合格最低点とか。ここ低いやんと思って。

D362：今年はめっちゃ高かったんですけど。で、別に〇〇〇をやりたいわけでもないですし。

D369：私なんか真面目ではないから。

D370：なんか授業に、出席取る授業あるじゃないですか。出席取るなら出るんですよ。取らない授業とか、5月から1回も出てないです。レジュメとかも友達に頼んで、宿題もなんか、ちょっとやってなくて、いろいろとやばいです。

*373：Dくんは、じゃあね、もしも大学を卒業したら、こんなことがしたいとか、こんな仕事が見たいとか、そういう夢とかありますか。

D373：全くない。

D374：大学に入るのも、なんか、別に、これをやりたいとかではなくて、自分を証明したい、みたいな。昔から自分もなんか、他の人も、あいつ勉強できへんみたいな、こいつ勉強できへんみたいなイメージがあったんですから。

D377：この高校行ってるから、そんな頭良くないだろうみたいな。

D378：それは嫌やなと思って、頑張りました。

*379：じゃ、自分を認めてもらいたかった？

D379：認めてもらいたって、なんか、当然自分のためにもあるんですけど。也有为自己的（自分のためでもある）。但大多都是，但是我就觉得以后我想要在日本工作（でも一番の理由は、将来日本で仕事をしようと思ってて）。

D380：就是，这个，日本，怎么说呢。就是，小时候也不在日本长大，然后母语也不是日文。（つまり、この、日本、なんて言ったらいいのかな、つまり、子どもの頃日本で育ってないし、自分の母語も日本語じゃないし。）

D381：然后再就是妈妈，母亲也是中国人。就觉得可能很累吧，就是以后出了社会之后。（それからお母さん、母親も中国人で。多分すごく大変だろうと思って。つまり将来社会に出てからが。）

D382：对。要是没有一个好的学历什么的。可能就觉得很累吧以后。也有为自己的。就很多因素，考大学。

（もしも良い学歴とかが良くなかったら、多分すごく大変だろうと思って、将来が。自分のためでもある。いろんな要因があって大学を受験した。）

5.4.3. Dくんが中国語を学ぶ理由

Dくんは初修者のクラスで中国語を学ぶ理由について「単位が取れやすいと思って」と述べており、単位さえ取ればそれでよいと語っている。

D542：あれはもう完全に単位取れやすいと思って、とりました。

*543：hhh クラスってさ、既習者、既習者っていうか、既習者っていうのも変なんだけど¹⁶⁾、もう1個クラスあるの、とれないの？あれは？既習者クラス。

D543：とってないです。

*544：それは、えっと、知らなかったから？

D544：いや、めんどくさいと思って。

*572：自分はこのクラスでどうしたいと思う？何を求める？どういうことやってる？

D572：今はとりあえず単位をとれば。

5.5. E さんの場合

5.5.1. E さんのプロフィール

E さんは大学に通うため現在は姉と2人で京都に下宿をしている。E さんは父親が台湾出身で母親が日本人なのだが、小学生の頃に両親が離婚し、その後は母親と姉と一緒に暮らしている。そのため大学入学まで中国語に触れる機会はほぼ無かった。しかし小学生の頃に一度だけ、父方の祖父母に会いに台湾を訪れている。

5.5.2. E さんのライフ

E さんは現在父親と会うことはできていない。そして E さんは父親との思い出を次のように語っている。

E027：あんまりそのお父さんが、素直な人で「おお偉いなあ」とかいう人じゃなくて。ちょっとツンツンしてる人やったんで、そんな素直には褒めてくれなかったんですけど、なんか、体育祭とか体育大会で、リレーみたいなんで、こけたけど頑張って最後まで走ったりとか、そういう時とか頑張った時に「頑張ったなあ」って言ってくれたり、すごい覚えてます。（家が）中華料理屋さんやったんで、なんか、すごい、まあ、父さんはどっちかって言ったら、まあお姉ちゃんと仲よかったんで、そこまでたくさん話してたこともないんですけど、一緒に餃子の包み方とか教えてもらったり。

E さんは幼い頃からあるスポーツをやっており、高校も私立のスポーツ強豪校に通っていた。E さんは毎年全国大会に出場するほどの実力を持っており、その実績を活かして大学にも AO 入試で合格している。

E192：（周りは）ほとんどスポ薦¹⁷⁾で（大学に）行ってる子らばかりで。向上心がある

人ばかりやから、まあ自分がやって行く上ではいいんじゃないかなと思って選んだっていうのもあります。

5.5.3. Eさんが中国語を学ぶ理由

Eさんは中国語を学ぶ理由を2つ語っている。まず父親と会った時に中国語で話したいということを理由に挙げ、次に中国語を話して人助けをしたいと述べている。そして、中国語を話せることや人助けができることを「かっこいい」と表現し、それが他人のためにもなり、自分自身への「自信」にもつながると語っている。

E407：理由的には2つあって。

E408：なんか、お父さんが中国人で、会った時にしゃべりたいっていうのが1つで、で、なんか、日本って中国人いっぱい来るやないですか。薬局とかいろんな所で中国語流れてて。

E411：小学6年生、小学生の時に、あの一、すごい人が多い所の近くの学校だったんで、外国人もすごい多かった所。

E415：観光地だったんで、すごいいっぱい来てくれてたんですけど。(外国人が)話しかけてくれて、何言ってんのやろ、みたいな。日本語を話してくれてるんやろうけど、もう日本語じゃないし。なんか理解したいけどな、っていうところがあって。もし中国語も話せたら、そういう人がいたら助けられるんじゃないかなと思って。道案内もできたらいいなと思って。

*416：なるほど。自分にとって中国語を勉強することって、どういう意味があると思いますか？

E416：自信みたいなことです。

E417：だから、中国語話せるんやで自分、っていう自信とか。もし中国語話せたとして、その、誰か、中国人の誰かとかを道案内できるとかしたら、かっこいいじゃないですか。だから、なんか、多分、自分、他人のためでもあるし、自分の自信のためにっていうのも強いと思う。話せて助けることができたんだよっていう、自分への自信です。

Eさんは、今は父親と会うことはできないのだが、LINEを使って父親と連絡をとりあっている。そして父親に大学で中国語の学習を始めたことを報告したところ、父親が「うれしそうにしていた」と語り、Eさんも中国語を使って父親とやりとりができることを「うれしい」と述べている。そして姉と2人で中国語の学習を頑張りたいと語っている。

E039：なんか、もう離婚しても、まあ、お父さんとお母さんは、そんな連絡とってるとは思わないんですけど、なんか、うちとお姉ちゃんとは、誕生日とか父の日とか、そういう時には普通に連絡をしたりするし。前も、最近なんですけど「ちょっと中国語をなんか習ってて」っていう話をしたら、「そうなんや」って、すごいうれしかったみたいで。全部中国語で（返事が）返ってきて読めなかったです hhhhh。

E100：もうそろそろ誕生日なんで、自分の。その時に何か（中国語のメッセージを）送ります。何送ろう hh。

*102：じゃあ、よかったね、勉強して。こうやって中国語でやりとりできて。

E102：うれしいです。

E111：頑張ります。お姉ちゃんも（大学で）中国語とってて。

E113：頑張る。2人で頑張ろうねって。

6. 考察

6.1. 多様な言語環境下の学生たち

調査より5名の中国ルーツの学生の語りを分析してきたが、ここで改めて、5名の学生のバックグラウンドを整理してみたい。表2では5名の学生の両親の出身地、家庭内言語、中国滞在の有無、親族訪問の有無、大学入学前の中国語学習歴をまとめている。

表2を見ると、全員「日中・日台ハーフ」とは言ってもその言語背景は実に様々であることがわかる。Aくんのように家庭内では完全に中国語（桂林語）のみというケースもあれば、逆にEさんのように大学入学まではほぼ全く中国語に触れた経験がないという学生もいる。そしてこの5名の学生のうち、AくんとDくんは中国滞在経験があり、Dくんは中国国内で義務教育を受けている。そのためDくんは日本語よりも中国語の方が得意で、中国語の方が母語に近いと言えるだろう。

また注目したいのは、Aくん、Bさん、Cさんともに、大学で学習している標準中国語よりも、桂林語や上海語といった、親や親族が日常で使っている方言の方が身近であるという点だ。一般的に、中国の方言は「異なる言語」と言えるほど言語間の距離があるとされているのだが、Bさんの語りからは、似ているものの中にはあり、方言を中国語学習のヒントとしている様子がうかがい知れる。しかしBさんとCさんはともに「現在よりも子どもの頃の方が上海語はできた」と語っている。

このように、一口に継承語学習者と言っても、実に多様な言語環境で育った学生が在籍していることが調査からは見えてきた。

表2 5名の学生の言語環境

	出身地		家庭内での使用言語		中国滞在時期	親族訪問	中国語 学習経験
	父	母	父	母			
A	日本	中国 (桂林)	—	桂林語	幼稚園時に半年	有 (毎年)	有 (小学校)
B	日本	中国 (上海)	日本語	日本語	無	有 (毎年)	有 (高校)
C	中国 (上海)	日本	日本語 + 上海語	日本語	無	有 (毎年)	無
D	日本	中国 (上海)	日本語	上海語	～小学校卒業	有 (毎年)	有 (小学校／ 現地校)
E	台湾	日本	—	日本語	無	小学生時 1度だけ	無

6.2. 学生たちは自己の「ルーツ」をどうとらえているのか

学生たちの語りをふり返ってみると、Aくん、Bさん、Cさんは自分のルーツに誇りを持っており、高い自己肯定感を持っていることがわかる。Aくんは子どもの頃には「中国人」と言われ、自身のアイデンティティが揺らぐようなこともあった。しかし、高校時代に中国語能力を活かして通訳を担当し、周りの先生や友人から「すごい」「ありがとう」と言われたことでやりがいを感じ、この体験が彼のその後の自己肯定感にもつながっていったと考えることができる。Bさんは、自身が「ハーフ」であることを「うれしい」と語っており、母親の故郷である上海を「おしゃれ」「めっちゃ好き」と語っている。Cさんもまた「中国が好き」と語っており、Bさん、Cさんともに自己のルーツに対して肯定的な考えであることがわかる。

反面、Dくんは自分の学歴に対して強いコンプレックスを持っており、「底辺高校」から「良い大学」へ行くために必死で勉強をした過去を持つ。そして自己のルーツに関して「子どもの頃日本で育ってないし、自分の母語も日本語じゃない」「母親も中国人だから、将来社会に出てからきっと大変だろうと思う」と語っている。Dくんの語りからは、彼は自己のルーツに対して肯定的な見方をしておらず、将来に対しても不安も抱えている様子が見られる。

Eさんは、長らく父親と離れて生活をしているためか、自身が台湾にルーツを持つことを格段意識している様子は見られなかった。しかし中国語が話せたら「かっこいい」と語っている。

6.3. 大学への入学経路と中国語の履修状況

次に学生たちの入学経緯と中国語の履修状況を見てみたい。表3を見ると、5名の学生はそ

れぞれ異なる経路で大学に入学していることがわかる。Aくんは公立中学から公立トップ校に進み、そして自身の中国語能力を活かしてAO入試で大学に合格している。BさんとCさんは家族の勧めもあり、ともに中学受験を経験し、私立の中学・高校に通っていた。Bさんは立命館系列中学・高校から、大学受験を経験することなく、そのまま内部進学をしている。Cさんは小学校から私立に通っており、さらに中学受験を経て小学校とは別の私立中学・高校に通い、一般入試で大学に合格している。Dくんは、中国語力を活かして大学に入学したAくんよりもさらに中国語能力が高く、ネイティブレベルと言えるほどである。Dくんの日本語能力は中国語能力より劣るため、受験科目の中でも国語には苦勞していたのだが、並々ならぬ努力により一般入試で大学に合格している。Eさんは幼い頃から続けてきたスポーツでの実績が評価されAO入試で合格している。このように、現在では大学の入学経路も多様化しており、選択肢が増えて間口が広がったことにより、多様な学生が入学するケースが増えてきていることを本調査の結果もまた裏付けている。

表3 5名の学生の大学入学経路と中国語の履修状況

	出身高校	大学入学	在籍クラス	中国語を学ぶ理由
A	公立トップ校	AO入試(中国語)	既修者	中国語力の向上 自身の「ルーツ」
B	立命館系列校	内部進学	既修者	中国語力の向上 自身の「ルーツ」
C	私立上位校	一般入試	既修者	中国語力の向上 自身の「ルーツ」
D	公立下位校	一般入試	初修者	楽に単位をとるため
E	私立スポーツ校	AO入試(スポーツ)	初修者	父とのつながり 自分自身への「自信」

次に中国語の履修状況を見てみたい。Aくん、Bさん、Cさんは現在「既修者クラス」に在籍しており、ともに中国語力のさらなる向上を目指している。Aくんは「中国の方言を研究したい」という目標を語っており、Bさん、Cさんは中国語の学習歴があるにも関わらず「既修者クラス」を受講しない学生に対して「向上心がない」と考え、否定的な見方をしている。この3名に共通するのは、全員が語りの中で、自身の「ルーツ」について触れている点である。Aくんは、中国語を学ぶことによって「日本のアイデンティティと中国のアイデンティティが多分両方いい具合になって自分の中で共存できる」と語っており、BさんとCさんはともに「自分は半分中国の血が流れている」「だから中国語も日本語と同様に話せるようにならなければならない」と語っていた。

DくんとEさんは中国語を学習したことがない初修者のためのクラスに在籍している。D

くんは「単位がとりやすい」から初修のクラスにいると述べており、「単位さえとればそれでよい」と考えている。D くんの話からは、D くんにとっては「良い学歴」を手に入れることが大学入学の最大の目的であったと考えられ、大学の専門についても自身の興味ではなく入学のしやすさを基準に選んでいる。そして授業への参加姿勢についても自分で「私なんか真面目ではないから」と語っている。E さんは D くんとは全く異なり、大学入学前に中国語に触れた経験はほとんどない。そして E さんにとって中国語を学ぶことは、父親とのつながりのためでもあり、「親子の絆」の役割を果たしていることがわかる。そして中国語ができれば、自分自身の「自信」にもつながると語っている。

7. おわりに

外国語教育とは従来は外国のことばを教える教育であった。しかし大学に進学する外国ルーツの学生の増加により、近年では大学の外国語教育のクラスに外国にルーツを持つ学生が一定数に達し、母語や自身のルーツのある国のことばを学ぶようになってきている。継承語はその習得過程が母語とも外国語とも異なるということは海外の研究でも明らかになっており (Campbell & Rosenthal 2000)、小川 (2018) では継承中国語学習者は一般の学習者とは異なる経路で語彙知識を獲得することがあることを報告している。同時に小川 (2018) では、継承語学習者の中には、大学入学後に学習を始めた一般の学習者に途中でぬかされてしまう者も少なくないことも指摘している。

本研究で調査に協力してくれた5名の学生は各々異なるバックグラウンドを持っていたが、自己の「ルーツ」に対して肯定的な考えを持ち「既修者クラス」を自ら選択していた学生たちは、中国語能力の更なる向上を目指しており、学習に対する明確な目標を持っていた。A くん、B さん、C さんを担当する2名の中国語教員への聞きとり調査でも「3人とも、とてもモチベーションが高く、能力も高い」という声が聞かれた。その一方、中国語がネイティブレベルにも関わらず初修者のクラスに在籍している D くんは、自分の「ルーツ」に対して肯定的な見方をしておらず、中国語を履修するのは「楽に単位をとる」ためであった。D くんを担当する2名の教員からの評価も「授業中はよく携帯を見ている」「授業中の参加態度もよくない」というものであった。また E さんのように、中国語圏にルーツを持っていたとしても、大学入学まではほとんど中国語に触れたことがないという学生も、今日ではよく見られるようになってきている。

また言語能力に関しては、A くん、B さん、C さんの担当教員は「中国語は流暢だけれど発音が訛っている」と評価しており、3名の学生がそれぞれの方言の影響を受けている可能性が考えられる。そして「ペーパーテストでは思ったほど点がとれない」という声もあり、継承語学習者の言語能力の中の弱い箇所、苦手とする部分をどのように補っていくべきなのか、今後

の長期的観察や更なるデータの蓄積が必要とされるだろう。継承語学習者がすでに持っている知識と能力を如何に活かし、彼らに適した言語教育を行うのか、これは今後の教育において検討されるべき問題である。大学に進学する外国ルーツの学生が今後さらに増加することを見据え、すべての学習者が本来持っている能力をさらに伸ばす教育が受けられるよう、大学における外国語教育をいま一度見つめなおす転換期が来ていると言えるだろう。

【付記】本研究は科学研究費補助金（JP19K13277、代表：小川典子「継承中国語学習者のアイデンティティと言語能力の縦断的研究：大学外国語教育への提言」）の助成を受けたものである。

注

- 1) 出典：文部科学省『平成 27 年度学校基本調査』http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/121/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2016/03/08/1366441_05_1.pdf 数値は 2015 年 5 月 1 日時点。
- 2) 出典：厚生労働省『平成 28 年度人口動態統計特殊報告』の「婚姻に関する統計の概況」より「統計表 4 夫妻の一方が外国人の婚姻件数の年次推移」<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/konin16/dl/02.pdf>
- 3) 出典：文部科学省『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成 30 年度）の結果について』http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/_icsFiles/afieldfile/2019/09/27/1421569_002.pdf 数値は 2018 年 5 月 1 日時点。括弧内は構成比を表す。
- 4) 法学部・産業社会学部・国際関係学部・文学部・経済学部・食マネジメント学部・経営学部では 1 回生は全員必修である。
- 5) 文学部・食マネジメント学部では、イタリア語も履修することが可能である。
- 6) 法学部・産業社会学部・国際関係学部・文学部・経済学部・経営学部が既修者対応プログラムに対応している。
- 7) 立命館系列高校の中の 1 校。本研究の調査協力者 B さんの母校。個人情報保護の観点より、本稿ではアルファベットを用い、具体的な校名を伏せている。
- 8) 1 単位は 45 分授業を週 1 回・1 年間学習するものとする。
- 9) 発話番号の冒頭のアルファベットは各学生を表し、「*」は筆者の発話を表す。後半の数字は発話の通し番号。
- 10) アルファベットを使って表した中国語の発音表記。
- 11) 中国の「湖南省」を指している。
- 12) 「インスタントラーメン」の意味。通常、中国大陆では一般的に“方便面”と言うが、台湾では“泡面”と言う。
- 13) 中国語の音の上げ下げを表す声調のこと。四種の声調から「四声」という。
- 14) 「h」は発話中の笑いを表す。
- 15) 「Beyond Borders Plaza」の略。立命館大学のキャンパス内にある、国際交流や言語学習を目的とした施設。

16) Dくんは中国語が母語で、「学習」して身につけたとも言い難いため、筆者はこのような表現をしている。

17) 「スポーツ推薦」を意味する。

参考文献

小川典子 (2017) 「汉语高考の内容有効度分析——以 2010–2016 年の试卷为对象——」『中国語教育』15 : pp.147-167

小川典子 (2018) 「継承語としての中国語学習者の語彙知識の獲得—中国語専攻に在籍する大学生のケーススタディー」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 学会 2018 年度研究大会予稿集』: pp.90-91

川上郁雄、尾関史、太田裕子 (2011) 「『移動する子どもたち』は大学で日本語をどのように学んでいるのか—複数言語環境で成長した留学生・大学生の日本語ライフストーリーをもとに—」『早稲田教育評論』25 (1) : pp.57-69

川上郁雄 (2015) 「複言語で育つ大学生のことはとアイデンティティを考える授業実践」『早稲田日本語教育実践研究』3 : pp.33-42

近藤ブラウン妃美、坂本光代、西川朋美 (2019) 『親と子をつなぐ継承語教育：日本・外国にルーツを持つ子ども』東京：くろしお出版

桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞きかた』東京：せりか書房

桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論』東京：弘文堂

櫻井千穂 (2007) 「渡日直後の外国人児童の在籍学級参加への取り組み」『日本語・日本文化研究』17 : pp.155-164

櫻井千穂、孫成志、真嶋潤子 (2012) 「日本生まれの中国ルーツの児童に対する二つの言語能力評価と言語教育の重要性—児童 K の二言語能力の変化に着目して—」『21 世紀の世界日本語教育・日本語研究—中日両国国交正常化 40 周年記念論文集』: pp.188-197

田慧昕、櫻井千穂 (2017) 「日本の公立学校における継承中国語教育」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』13 : pp.132-155

友沢昭江 (2014) 「帰国・渡日生の言語能力—高校から大学への学びの連携をめざして—」『国際文化論集』49 : pp.109-140

中島和子 (2010) 『マルチリンガル教育への招待：言語資源としての外国人・日本人年少者』東京：ひつじ書房

中島和子 (2016) 『完全改訂版バイリンガル教育の方法』東京：アルク

中島和子 (2017) 「継承語ベースのマルチリテラシー教育：米国・カナダ・EU のこれまでの歩みと日本の現状」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』13 : pp.1-32

真嶋潤子、櫻井千穂、孫成志、于涛 (2014) 「公立小学校における低学年 CLD 児への言語教育と二言語能力：中国語母語話者児童への縦断研究より」『日本語・日本文化研究』24 : pp.1-23

真嶋潤子 (編著) (2019) 『母語をなくさない日本語教育は可能か：定住二世児の二言語能力』大阪：大阪大学出版

三代純平 (編) (2015) 『日本語教育学としてのライフストーリー—語りを聞き、書くということ』東京：くろしお出版

Campbell, R.N., & Rosenthal, J.W. (2000). Heritage languages. In J.W. Rosenthal(ed.), *Handbook of* 176 (762)

大学における継承語教育の展望（小川）

undergraduate second language education, Mahwah NJ: Lawrence Erlbaum, pp.165-184

曹贤文（2014）「“继承语” 理论视角下的海外华文教学再考察」『华文教学与研究』56(4)：pp.40-54

（小川 典子，立命館大学言語教育センター外国語嘱託講師）

大学继承语教育的展望 ——选修汉语课的华裔学生案例研究

在日本随着中国移民和跨国婚姻的增多,近几年就读大学的华裔学生也逐渐增多,并且这些华裔学生就读大学后不少人选修汉语课。“继承语”是由父母传承给子女的语言,因此对于这些学生来说汉语即是继承语。将汉语作为继承语的学习者的背景各不相同,有的学生上大学前从来没有接触过汉语,有的学生在家里主要使用汉语交流,有些学生在中国国内受过教育,汉语水平甚至比日语还高。那么,对这些学生来说学习汉语究竟有什么意义?他们为何在大学选修汉语课?

在立命馆大学要求学生必须从德语、法语、汉语、西班牙语、韩语当中选择一门语言作为第二外语。同时,立命馆大学二外课开设两种课程,一种是针对零起点学生的“初修班”,另外一种是针对有汉语基础的学生的“既修班”。当前继承语学习者不仅存在于既修班,同样也存在于初修班。本研究将立命馆大学二外汉语课两种课程里的五名继承语学习者作为研究对象,采用“问卷法”与“生命故事访谈法(life story interview method)”调查了他们的背景及汉语的选修情况。根据访谈内容,我们分析了学生在大学学习汉语的理由、他们对自己背景的看法以及这些因素对汉语学习的影响,最后我们还探讨了今后的大学继承语教育的发展前景。

(小川 典子,立命馆大学语言教育中心汉语讲师)